

運河に映る未来

014 立教新座中学校・高等学校 鉄道研究会

もう、この街を去る潮時かな。

1970年代のある晩秋の日、一人歩くいつもの下り坂。かつて北のウォール街と呼ばれた小樽もその役目を道内の他の都市に譲って衰退の一途を辿っている。私の旧友もあの線路を走る汽車に乗ってみな札幌へ行ってしまった。

そんなことに気を取られて、うっかり初雪に足を取られて転んでしまった。

「しまった！！」

気が付くと、そこは未来のようだった。遠くに馴染みのない無機質な警笛が聞こえてくる。洋菓子の甘い匂いにいざなわれ、私は自ずと真新しくもどこか懐かしいような西洋風の街並みの方へ足を運んでいた。オルゴールの上品な響き。透き通った硝子の置物。煌々と道を照らすガス灯。そして、街の光と人々の笑顔を映し出す運河の姿。

「この街もまだまだ捨てたもんじゃないなあ…」
心地良い瀬音に身を委ね、おもむろに瞳を閉じる。

気が付くと、そこはいつもの下り坂だった。

もう少しだけ、この街で頑張ってみようかな。



旅する
江戸川乱歩賞
2026 出展作品